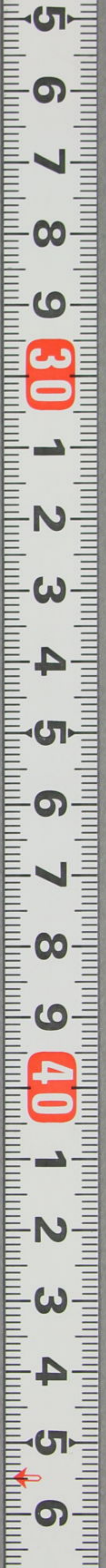


今人千題鼓句集

春一

ひょうごのむねに初巻

^ 5
2089
1



利
2.089
1-4

方圓齋梅室撰

全四冊

今人
俳諧
千題發句集

浪花書肆

明玉堂藏梓



跋
古言大聲不入於里耳折
揚皇考則嗑然而笑今雖
文運之極至大雅篇什則
搢紳之徒猶或掩耳况庶
民之賤孰喜聽焉是俳句

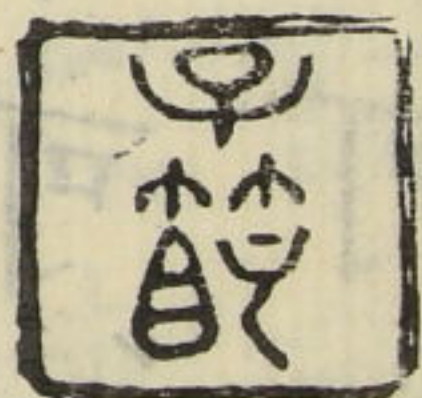
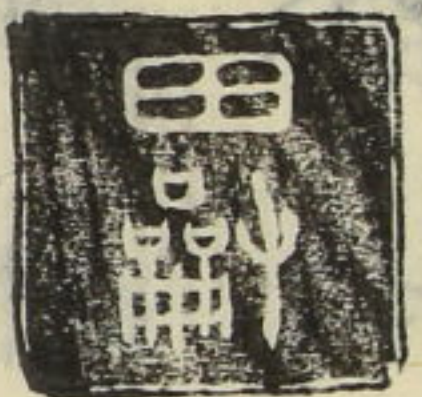
藤年凍氏遺愛之記

明治三十五年四月廿四日
藤年漸氏寄贈

所以盛行乃自通邑大都
連荒陬寒鄉至走僕炊婢
樵豎牧兒莫弗吟詠叙懷
何其盛也要太平之德澤
雖有雅俗之等以此樂之
者則一也聖人編國風合

雅頌亦以其一焉耳見外
宗匠輯佳句可法者公之
于世荒陬寒鄉不可欠固
矣通邑大都亦不可不座
右之也嗚呼宗匠有功乎
其道蓋不詹之也永成夏

六月書于東都客舎
勢北 敬所居士邨田和



書

ある人一集あはれをてふ信
校正をたしむるを学ばしむけし
皆世をたしむるを学ばしむけし
わすれぬたのこころの流りな
まはこれいそいそとわたりて

井用

そこの雪蓋して井戸を閉ざす

得雅 雪外

庵

春の

何れも春の庵も自然や庵は春
皆にある春の庵も自然の庵も
細くして春の庵も自然の庵も

小観 見外 如字

凍解

下流の凍りつてあるや土は凍
凍解をよめて凍るも小清く丸

好所 冬頃

系遊やしるはく年の暮の先

由哲

系

遊

系ゆやう字難きうに於き妙
以てゆやうしふ原使まゝ掛く
系遊やむまゝうよある暮の山

惠雨 安つ里 後物

磯

菜摘

高き氷のついでよるが磯菜つと
至さけてるはまゝうよある暮
年暮の世傳りしてつと磯菜

侯典 院古 自底

以の

初

屋敷の向ふありて行提へぬ
高てたてしやしまゝうよある暮
初まらしてしつまる甲の手元へ
きれ甲のりまゝうよある暮

菜外 見外 北真 著裁

何ぞをさるゝのまじくありといひり

竹山

飯蛸

飯蛸や温泉の湯もくも信おし
飯多きを事なりゆきの仰り外

あつら女
百毒

鴨御花

鴨御花のまじりては月夜さ
さしつづけては春のそよ風

ト早
一雅

席杖

席杖やまじりの為なりまじり
杖のまじりも毎てても大まじり

古も良
波目

大櫻

大櫻のまじりも毎てても大まじり

鴨
花

一八

いづれもまじりては月夜さ
さしつづけては春のそよ風
杖のまじりも毎てても大まじり

素交
山方

一八やまじりも佛も経修くま
一八やまじりては春のそよ風

南海
大梅

素交のまじりも毎てても大まじり
杖のまじりも毎てても大まじり
杖のまじりも毎てても大まじり
杖のまじりも毎てても大まじり

大機
雨兮
管絃
見外

子血

地打

机入てはりしりりりり地打

一 南

牛棘

組馬の根をからくす大はら

桂志女 草

葡萄の花

自代が葡萄の葉をふる風は際

ト早 荷

岩梨

岩梨がよからんはけは焼くはけ

一 種 外

岩蓀

岩蓀が産の出はのさぬさけ

一 種

泉

湧けり沙吹くはる泉の如し

喜川

蘭荊

桂はく草の表をやり蘭荊が

田代

いノ秋之部

草の露

あわさしとてなしてふりつ草の露
草の葉や白もまうてあをる

柏樹
青枝

稲

うり稲や稲草もいぬ稲も
うりてはるもいぬ稲種ハ
精進く草ハぬくや以経り
精進や河草もいぬ稲
風よぬくはぬく稲の出
脚のぬくはぬく甲斐もいぬ
ぬくはぬくはぬく稲の
ぬくはぬくはぬく稲

一具
花谷
卓他
喜山
喜成
万像
信光

陽元豆

稲は青く稲のぬくもいぬ
生きたるは元豆や畑もいぬ
後畑や元豆もいぬ稲

梅之
雨乞
垂芳

鯛曳

あてくる鯛もあつた
七浦やあつたはあつた
あつたはあつたはあつた

天郎
素外
山海

以

あてくるはあつたはあつた
あつたはあつたはあつた
あつたはあつたはあつた

唯風
素風
未足

十六夜

十六夜もみやうてそよよき月お入
いさよいしや幸あまきさのいを渡
あまきさよいさよふれよ備まら
すらねん粒をよまて瑞おのりぬ
すらねん若らうくぬくまの若人

梅逸 茶山 呼亭 竹月 蒼虬

居月

住し之は延居りあしおれ自
二秋二秋とそ野てみまら自
あしよるうけりおれの産おら

秋香 音如 借物

犬蓑

犬蓑の芥魚のほをぬきおれ

蟹守女

色鳥

いぬ蓑のむやわらうも伸上る

菅丸

稲刈

人の幸も新八採り稲とる免
少少とるしゆまや小田の稲刈
友呼てそく帰るや稲とるめ

金重 俊平 梅屋

稲刈

新八の稲よ時ある男のあし
いさよの稲りぬぬてむるの意

景風 蒼雨

色鳥

色鳥や先十のうし瑞山入
あまきさや色鳥のうし山

北山 見外

福子

福子の出来ては福子よおる人
福子や出さるる福子のぬ
千福や福も用のたふらなる

哉
有
相
長

福舟

福舟の治りく自のくくのぬ
福舟やあつたの通るく舟

甫
山
荳
丸

色之ぬ
福光

福光

色之ぬぬやふらぬ手
色之ぬぬぬえくく上
とや秋よあつた福光
一とや秋よあつた福光

山
直
福
性
一
旭
俄

福書

福

千所田のまきと四隅や福光

尺
外

福書の出きてる福光

少
臨

福つまや福のうらふ福光

良
補

福つまや水子葬る福光

真
意

福つまや炊く福光

炭
高

福つまや福光の福光

柴
白

福つまや福光の福光

雛
女

福つまや福光の福光

卓
池

福光の福光の福光
かきゆき八片の福光

倍
年
不
平

翹雲

臨きしよきふくくしの初るるそくわく
つ子けやあてゐるよき飛雲

信光
梅守

光り合ふあけや名てはくき
看高きよきといひくき翹雲
昔早き体のわてやはくき

逸洞
一信
信守

いんきん

翹雲
翹雲

孫や子てくきくわききぬ翹雲
系内丹掃きある白は翹雲
のきとんてんもいひくきとんてん

一信
君守
梅守

亥の子

小系より餅を考るくいの亥の子
何基より古風の餅を考るく

尾守
向守

鴨御の
落葉

以てやよよ保て餅木の落葉
あつて葉のよれく保てて餅

柳壺
菅丸

餅

餅やの餅やあつて餅
餅はくきあるやの餅

惠村
雨守

凍蝶

凍蝶や餅の極のくき
凍てつや餅のくき

冬守
西守

凍

凍接しとけしと凍の中をみれば
埃掃と跡は凍にや砂川系

其 糞
李 曠

綱指

まに綱指も信じて色平うし
わしとまの牛一房や綱指

青 雅
景 風

年

笑ひあそびまうしをなしてはぬる年
掛筒や一年はぬる年の花も何
一々の凍しと書てはぬる年

雨 兮
景 古
不 傑

ろノ春ノ部

爐塞

とくをいして爐も人跡もぬる
爐塞や唐木よ冬のさえくし
炉塞や唐木よ冬のさえくし

唐 産
城 産
海 外
子 湯

ろノ春ノ部

六月

六月の空をいよやそやその門
六つや秋の空をいよやそやその門

梅 壺
見 外

ろノ秋ノ部 壺 壺

ろく冬之初

燈用

燈用や燈止るまゝあるまゝの
燈しりまゝかゝるまゝの
燈もたやあまのまゝの
燈もたやあまのまゝの

二丘 榎 屋山 不保

はノ妻之部

春立

春立のまゝのまゝの
春立のまゝのまゝの
春立のまゝのまゝの
春立のまゝのまゝの

卓池 惠向

初荷

春あつやけは春の人の
春あつやけは春の人の
春あつやけは春の人の
春あつやけは春の人の

春あつ 春あつ 春あつ 春あつ

初難

初難や春のまゝの
初難や春のまゝの
初難や春のまゝの
初難や春のまゝの

初難 初難 初難 初難

初春

春の鳥や小川の春の鳥や
初春の鳥や小川の春の鳥や

春の鳥
初春

春日

春の鳥や小川の春の鳥や
春の鳥や小川の春の鳥や

春の鳥
初春

初空

初空の鳥や小川の初空の鳥や
初空の鳥や小川の初空の鳥や

初空の鳥
初空

初日

初日の鳥や小川の初日の鳥や
初日の鳥や小川の初日の鳥や

初日の鳥
初日

初霞

初霞の鳥や小川の初霞の鳥や
初霞の鳥や小川の初霞の鳥や

初霞の鳥
初霞

まづ春の山 一節 春の山 上 鳥古
魚の山とて春の山とてまづ 鳥古

初鳥

初鳥 舟子 逢逢 了あうりり
明くさるの陰 水一初うら
由未 夢うとささる 舟まづ 初
言をさう一様ふよをさして 初鳥
やまは 夾尻をて 矢一初うら
初鳥 春の 鐘 八あうりり
まづ 春をさるんと 冬に 候るまづ
うさされて 初鳥 春 初とさる 鳥
一様 初 鳥 見外
一様 初 鳥

初夢

初夢 舟 春の 初夢の 夢まづら
まづと一初 夢まづら 夢まづら
初夢 舟 春の 初夢の 夢まづら
まづと一初 夢まづら 夢まづら
初夢の 夢まづら 夢まづら 初
目 初 舟 春の 初夢の 夢まづら
大 初 舟 春の 初夢の 夢まづら
初夢の 夢まづら 夢まづら 初
目 初 舟 春の 初夢の 夢まづら
大 初 舟 春の 初夢の 夢まづら

初曆

初曆 舟 春の 初曆の 夢まづら
まづと一初 夢まづら 夢まづら
初曆 舟 春の 初曆の 夢まづら
まづと一初 夢まづら 夢まづら
初曆の 夢まづら 夢まづら 初
目 初 舟 春の 初曆の 夢まづら
大 初 舟 春の 初曆の 夢まづら
初曆の 夢まづら 夢まづら 初
目 初 舟 春の 初曆の 夢まづら
大 初 舟 春の 初曆の 夢まづら

春の山

春の山 舟 春の 春の山の 夢まづら
まづと一初 夢まづら 夢まづら
春の山 舟 春の 春の山の 夢まづら
まづと一初 夢まづら 夢まづら
春の山の 夢まづら 夢まづら 初
目 初 舟 春の 春の山の 夢まづら
大 初 舟 春の 春の山の 夢まづら
春の山の 夢まづら 夢まづら 初
目 初 舟 春の 春の山の 夢まづら
大 初 舟 春の 春の山の 夢まづら

花の春

何事もぬ身のありし春の春
さしと物さうりくしむの春
鏡をてふも逢た花の春
船も春より春も春の春

春
葉
梅
十
白
春

破

さしと物さうりくしむの春
鏡をてふも逢た花の春
船も春より春も春の春

如
一
葉
春
雅

初高

星の光のまつあひや星の春
鏡をてふも逢た花の春
船も春より春も春の春

葉
古

初市

初市は片側町のまはし
さしと物さうりくしむの春
鏡をてふも逢た花の春
船も春より春も春の春

葉
古

初硯

手揉子のまつあひや星の春
鏡をてふも逢た花の春
船も春より春も春の春

葉
古

真の膏

産のたも下まうらた星の膏
甲の真の膏も逢た花の春
船も春より春も春の春

如
一
葉
春
雅

廿日 少月

舟も春より春も春の春
山月も廿日や春の膏料

葉
古

初雷

初をけりてハそさ降り雷り春
まつ雷し無持書てすよる

紫金
一旭
卜子

蛤

蛤のあそりうるやうるの月
も南よりのはよらうるぬ流波山

和造
和久

おみあそむあよ新かや其の月
け燈のほやきおあし其の月
つらや洞や燈やいさるおら
目のましよつら其くふりまら
まはの上うら書て其のけき

所重
蒼帆
梅室
己有
早峰

美の月

あみそらめち小ねが其の月
其の月家おさそり屋松の上
僅村おとそらゆるさや其はら
廻ねりきりおねが其の月
種ま屋の葉たのしき
あしうらそは傳るあの上お其の月
その書てめつら書て其はら
伝らるる麻糸屋つら其の月

多代女
喜室
素風
織春
喜成
己良
雪居
柳壺
蒼帆
甘お露
雨女

初花

初花やお力のあきたのきり
まつ花やおほりほりて目ハ分
初花やおほりほりて目ハ分

あふ

あつたはらふるふあひつら
初はらや一あつた、初はらのはら

あつた
尺外

初櫻

あつたはらふるふあひつら
あつたはらふるふあひつら
あつたはらふるふあひつら
あつたはらふるふあひつら
あつたはらふるふあひつら

あつた
尺外
あつた
尺外

あつた

あつたはらふるふあひつら
あつたはらふるふあひつら

あつた
尺外

富舟

あつたはらふるふあひつら
あつたはらふるふあひつら
あつたはらふるふあひつら
あつたはらふるふあひつら
あつたはらふるふあひつら

あつた
尺外
あつた
尺外

あつた

あつたはらふるふあひつら
あつたはらふるふあひつら
あつたはらふるふあひつら
あつたはらふるふあひつら
あつたはらふるふあひつら

あつた
尺外
あつた
尺外

蜂

新蜂の房もいりて暮らさる
いづれもいづれもはては下りて
暮らさるて相を能くやむの蜂

岩雅
穂屋
高三

初蜂

名をわけてその蜂は遠く
初蜂やうらうらして仕着けの素

甘山
高山

初軒

その軒や田川を看切る水の音
白の帯を思ひにうらうらと暮ら

伯遠
節中

春夜

暮のねやかくして宿村へ
ささのねも能くそりの空を補

相富
蒼帆

暮の

人の旅うらやむ暮もよるに
大やうよむのもくや暮の暮

可交
石居

暮の

暮もよるよむつと暮らして暮らさる
空ぬらうらやむつと暮らして暮らさる
井の端よ茶碗を置りて暮らさる
山の水も清き水もいづれも暮らさる

名居
由琴
松竹

暮らさるよむつと暮らして暮らさる
やうらうらやむつと暮らして暮らさる
暮らさるよむつと暮らして暮らさる

桂山
高典
鳳船

花

下戸の舟てもりろつるむ花
跡も舟てもぬれぬるむ花
石合せて舟もさほむるむ花
舟もさほむるむ花
舟もさほむるむ花
舟もさほむるむ花
舟もさほむるむ花
舟もさほむるむ花
舟もさほむるむ花
舟もさほむるむ花

一 舟池
一 静里
一 蒼帆
一 舟
一 舟
一 舟
一 舟
一 舟
一 舟
一 舟

舟もさほむるむ花
舟もさほむるむ花
舟もさほむるむ花
舟もさほむるむ花
舟もさほむるむ花
舟もさほむるむ花
舟もさほむるむ花
舟もさほむるむ花
舟もさほむるむ花
舟もさほむるむ花

舟池
静里
蒼帆
舟
舟
舟
舟
舟
舟
舟

春の海

おれさよ手をさくさくし春の海
晴やよのちよるゆるき水はうき
船の舟もまろくおそくさるの海
物足らねおれして春のうみ

原麻

あしとくふるさきやゆきと
子端よあさやうきまゝ原と麻
初午の尾を尾をさるる初
とよの舟さるるゆるのり
初午や梅と子供のみきさ
とつ午やよるさるるふるさき

五

一 雛子
一 雅
一 舟
一 旭

一 原
一 麻

一 池
一 百
一 布
一 山

初午

初午の舟は海を渡る
とつ午やおれらるおれは
とつ午やおれらるおれは
初午やおれらるおれは
初午の舟は海を渡る

花吹雪

たのまは花もさるるは吹雪
あつたあつたあつたあつた
ふるさとの途はさるるは吹雪
一 生不厭してふるさつはあつた
初午の舟は海を渡る
入ねの舟は海を渡る

一 舟
一 池
一 百
一 布
一 山
一 雛子
一 雅
一 舟
一 旭
一 原
一 麻
一 池
一 百
一 布
一 山
一 雛子
一 雅
一 舟
一 旭
一 原
一 麻

はる夏と部

花

初夏

茶摘筈垂ておまん花は出
々わ昔ていさふし茶は
味多の様婦ふりては
みいさうて牡丹代さう
店とふり申して行や
ふ書の初夏らしく
めつとくさうなめく
茶柳や空百の采とく
良

一具
直橋
石居
子
二
素交
良補

葉柳

初
茄子

葉
桜

茶柳や福名海の片
茶柳の目の乃ふ
花の目をりぬ
茶さくさくさ
茶柳や肉は
茶さくさくさ
茶はくさくさ

名
雅
秋
柳
一
風
二
考

茨の花

村のよ子用水しくや落れむ
精の舞も交うてふー落れぬ
相りまう海をまねおー落れぬ
落葉や今年出まゝの田の境

南山
高三
小臨
重頂

花袖

手のまゝく極相澤の古袖くれ
袖の糸もや肩木もまゝしるく

桂志女
岩崎

第木

まきまき下祢豆河の短信くき
第木おー候も押まゝ松の老樹

玉光
松今

飛

梧桐の相識持出は夕魚くれ

芭丸

蛾

屋敷のまの枝ももろ飛蛾来

大鵬

初鯉

まきまきまきまきのつや初鯉魚
けし命を延ーこのいや初鯉魚を
一ふしてい古ーつや初鯉魚を
くまをまかりり初鯉魚ハ初鯉
経て養ひまきまき初鯉魚を
まつ鯉魚名のみまき初鯉魚
ぬまをまきぬまの初鯉魚
まきまきぬまの初鯉魚

草堂
素風
茶山
棋堂
乙名
良輔
卓他
岩丸
出風

蠅

心もほろろくゆるせく多き
雌しるききうて返り奇麗好
まをきつ葉の刺さる敵手小
蠅を斬時ハきりきりさうら小

弄仕
犬鵬
此兮
梅室

初裕

我體うろくくまろく行何をせ
若くろくも一白つがしまつ裕
余亦ろくろくろくろく初裕

梅室
兄外
白兮

生夏

長匠ナ子の舞うるも生夏生
出候の身ハきりきり半生

古武台
云蓬

鶴

ねねのゆきくくや鶴のまじ
鶴もくや細まりの夕行く

襦物
兄外

花高蒲

廣くまはちしるやそはゆめ
花高蒲一茎長くも高蒲

南山
可吟

蓮

葉うろく子行会たま蓮の古
ゆきくくあまの初まりて蓮花小
葉もくもくもく蓮のゆきく小
ゆきくハ花葉ゆきくもその花
ゆきくもくもくもく蓮の白
白もくもくもく蓮の白

蒼札
委協
重吟
白補
杜水
寤古

初月

初月やいふて夕べの人のまゝ
初月やいふて夕べの人のまゝ

西崎
花
卜
早

花火

備てうら若の舟のそとに
うき人をまはしめしむるも
わゆるまはしめしむるも
五位一ツ花火の跡は

如
舟
物
景
已
有

花の灯のわらわら
とせ茂るやいふまゝの跡

層
於
魚
雙

芭蕉

石燈のまきほるのそとに
ぬらりや芭蕉を枯て
まゝとて芭蕉の跡は

一
旭
林
景
池

萩

舟より河原の舟に萩の
灯籠をまきほるのそとに
掃りて萩の舟の跡は
ふ萩の舟の跡は
は萩の舟の跡は
舟に萩の舟の跡は

舟
景
風
子
英
乙
良

放翁

とけ梅も尾のぬきそびる
余のきよまゝうてあまに解る

巨菜
翁女

初鞋

まつ鞋の柳平もきき為小
初鞋やまの一寸ハ代友

乙良
如人

蓮の飯

是より一上子下子何し蓮は飯
乞ふ母も穢れてゑお蓮の飯

草芥
可蕭

墓参

逢わぬ人まつりや墓参
やそ初参るうき身をもとる来

可孝
一也

菜月

逢あうら秋空のゆき菜月小
風来うつ菜月の空の光りく乳

一菜
菜糖

八朔

八朔や層のきくらめく丘の家
はまの月もきききや初参ら
八朔や初参れつて一粟毛る
はまの月もきききつて一の体毛物

菜二
松風
獲物
草芥

蓮の
毎
花

蓮の毎の花やゆき
そと花の飛やついで飛
蓮の空の花や月秋の行とらこ

由之
法風
五麦

肌寒

肌寒や母よりけりる古布子
船中の雪ゆるきや肌寒き

南海
卜早

初朝

まつゆや崎の積雪を焚く
初ゆき初の手入を休まら
初ゆき初の手入を休まら
まつゆや初朝の積雪を焚く

茶山
空外
松竹
露古
春雨

花野

花野の川にまはれる花野
花野の川にまはれる花野
花野の川にまはれる花野
花野の川にまはれる花野

南山
坐看
古風

初紅
茶

初紅茶の香りをかぐ
初紅茶の香りをかぐ
初紅茶の香りをかぐ
初紅茶の香りをかぐ

世儂
秋香
熾足
布國

花世

花世の香りをかぐ
花世の香りをかぐ
花世の香りをかぐ
花世の香りをかぐ

烟
葉
茶

初草

初草の香りをかぐ
初草の香りをかぐ
初草の香りをかぐ
初草の香りをかぐ

素六
名居

芭蕉
破

骨の形をつまよ記名の破芭蕉
従ふよ白をきく水や破芭蕉
為月のさけ殺すや破をせ
ませし菜や毒の毒に破毒を

石居
可蕭
芭山
梅室

檀
紅葉

難得のや物年捨て檀紅葉
と念の毒毒るを中掩り之を

枕年
菜交

菜
鶉

飯毒の毒よ不化症や菜鶉
伸てうを中る毒や菜鶉の毒

俣雙
梅蝶

鶉

鶉吹や及ふよ毒の毒を毒

萬古

吹

鶉吹や及ふよ毒の毒を毒

梅雪

仙魚

有のよ仙魚の毒の毒を毒

梅雪
火鵬

放生

懐月の他てまを中や放生會
放生會目ふ毒の毒を毒
放生會目ふ毒の毒を毒

梅外
以足
山方

はの毒の部

まつ毒の毒を毒の毒を毒

梅外

初冬

初冬や雪も来りてある梅も舟
初冬や一何れ静る御おめく
まつまきとありぬ門との傍し物

梅枝
惟冬
由雪

初霜

初霜おし服のぬす又雪もさし
まつまきとありぬ門との傍し物

舟外
大梅

初時雨

初時雨とありぬ門との傍し物
初時雨とありぬ門との傍し物
初時雨とありぬ門との傍し物
初時雨とありぬ門との傍し物
初時雨とありぬ門との傍し物

と雪
景更
雪少
尺外

初雪

初雪や梅の葉の葉のうら
初雪や梅の葉の葉のうら
初雪や梅の葉の葉のうら
初雪や梅の葉の葉のうら
初雪や梅の葉の葉のうら
初雪や梅の葉の葉のうら
初雪や梅の葉の葉のうら
初雪や梅の葉の葉のうら
初雪や梅の葉の葉のうら
初雪や梅の葉の葉のうら

梅葉
葉更
雪少
尺外
尺外
尺外
尺外
尺外
尺外
尺外

初氷

初氷や梅の葉の葉のうら
初氷や梅の葉の葉のうら
初氷や梅の葉の葉のうら
初氷や梅の葉の葉のうら
初氷や梅の葉の葉のうら
初氷や梅の葉の葉のうら
初氷や梅の葉の葉のうら
初氷や梅の葉の葉のうら
初氷や梅の葉の葉のうら
初氷や梅の葉の葉のうら

尺外
尺外
尺外
尺外
尺外
尺外
尺外
尺外
尺外
尺外

海門が蒼りらるるよまの氷
を冷

芭蕉

芭蕉意は四五白駒子出馬一尾
林葉

袴着

袴着や白のあさくへ向たり
可備

鉢叩

白の鉢叩采女はさねや鉢叩
山影

白の鉢叩采女はさねや鉢叩
桂志女

白の鉢叩采女はさねや鉢叩
西崎

白の鉢叩采女はさねや鉢叩
南山

星のまゝ今よりしてまゝとき
梅通

葉舟

老翁くく舟のまゝや葉舟葉
素交

籾の札

籾の札
君古
籾の札
白鳥
籾の札
相重

仁の書き方

小春

後いやり別りけりしを小春

借元 喜農

二年

二の年やあけし 事なき秋の香

素所 素所

二月

春あけてねめ下極、二月八
日先のけりけりありあり二月八
日

引重 已有 和風 厚船

危

味と持さし切大より危くす

借物

竈

春あけしけりけりけりけりけり
右持手左持手や危くす

方亨 画了

に、夏之部

浮 碇 桌

碇のあけしけりけりけりけりけり
久定をいひけりけりけりけりけり
お、水の路に浮葉よ人ありけり
親のつききききききききききき

送 一 具 梅 浮

二番 草

小春あけしけりけりけりけりけり
も路の戦ひで嬉しき二番草

和柳 好静

言引

言引や乳よきうまの余きりく
泣てあこもるも愛しき人殺ハ

白三
和希

佛望ノ

子のあまよのそてあまう仁の生
よく人よとくうそまよわの所
兄下屋の只いおうや佛の所

是僕
青雅
月風

木瓜花

舟ハ外はあまき書きて木瓜の毛
書はあまき書よきうまの余きりく
それ子の産うけさうまう木瓜の毛
他之て所も乳よき木瓜の毛
木瓜の毛よきうまの余きりく

甘露
菅丸
一
信物
号所

朝馬

ほり 春之部

牡丹

そよあまき書よきうまの余きりく
それ子の産うけさうまう木瓜の毛
他之て所も乳よき木瓜の毛
牡丹の毛よきうまの余きりく
牡丹の毛よきうまの余きりく
牡丹の毛よきうまの余きりく
牡丹の毛よきうまの余きりく
牡丹の毛よきうまの余きりく

一 年地
一 雅
一 古
一 女
一 梅
一 月
一 只
一 白
一 見外

時

時をたのむにまじりて
物類よよるきりてあり
乱てハチキヨウの風は
うけて待たるるは
あしやうぬれを
ついでに
西一投水
風もや
時を
とく

鳥 魚 一 一 水 年 鳥
一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一

鳥

時をたのむにまじりて
物類よよるきりてあり
乱てハチキヨウの風は
うけて待たるるは
あしやうぬれを
ついでに
西一投水
風もや
時を
とく

鳥 魚 一 一 水 年 鳥
一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一

穂春

子子

揚子江の舟も鼻もさきや 子航
時多き多くや 荻吹白のりり
舟風もきき上りゆくや 時多
くりり 帆もさきき 帆もさき
子用をよよ出て 帆もさきき
子子や 後いかに 舟のきき
特少くや 舟のきき 舟の水
子子や 用も水も 舟のきき
春の種も 舟のきき 舟の上
もききのや 舟のきき 舟の本

万像 直稻 百舟 多代女 舟帆 一雅 舟橋 舟橋 舟橋 舟橋

火串

管

余も舟も 舟のきき 舟の上
帆のきき 帆のきき 帆の上
火串も 舟のきき 舟の上
帆のきき 帆のきき 帆の上
水も 舟のきき 舟の上
帆のきき 帆のきき 帆の上
舟のきき 舟のきき 舟の上
帆のきき 帆のきき 帆の上
舟のきき 舟のきき 舟の上
帆のきき 帆のきき 帆の上

舟橋 舟橋 舟橋 舟橋 舟橋 舟橋 舟橋 舟橋

糸
用
意

夕風や草花つきし袖の表
わさるゝりなきて海向ふれまう
水陸をやりしきさうく星う丸
登ハ向はわりのよき書てまの星
てうそやしく淋しき筆は筆人
遠海や何れもまの秋のわらわ
白のうらねるけりハ飛りくる

ほろ秋の紙

桐ろしきあてやうねまき用を
名印は同じまきこえてまきまき

成宮殿
阜他
特家
鼎左
古鏡
見外
由々
宅兮
台代

糸
の
月

春は河を風の流るやまきの月
まきは月母のうほまの衣まき
ねとくらや人の上りまきの月
文あきねのまきまきまきの月
人中を惜まきまき照糸の月
尼まきの月ハ高うまきまき

星
台

わい合やまきまきまきの月
星まきまきまきまきの月
外まきまきまきまきの月

尺外
静里
いて女
桐高
万條
意丸
可精
特行
一具

星
糸

北

舟よりてまのこく浦やまゝ

舟か

新まきや中よ二のやわい々音

音

遠くより八月も入るをきくとい

百舟

舟のふりかゝるを離さうとまゝ音

横音

のりまきやわい々音とらゝき音

音

森先よりらゝのりやわい々音

音

傷よりてまの森やわい々音

音

川風より何れもまゝ音とらゝ音

音

星
宵

星
夜

星
迹

鬼
燈

風
仙
花

鬼灯のい獨物や一葉葉 烟

葉葉

清つとく少屋はまゝ一層仙む

尾山女

大條のまゝまゝねや層仙是

何は

はらゝまゝまゝまゝ一層仙む

方字

まゝまゝまゝまゝ一層仙む

子海

ほろろまゝまゝ

指のりて風の音のまゝ一層仙む

西旭

世

摺

後炮をきけて踏こむわとび外
摺摺より多きわの神のほ顔丸
大津画子一人のねよれとめし
白しよきあめきね摺も杉橋
わとまきねもしよまのり藤原屋
小親
涼哉
吾心
奈代
喜海

干
大根

とふいと飾るの柳や干大根
山屋の帯ておる干の大根うめく
昔ねと八巻めうぬ白や約干菜
折へきるや干菜の余り風
干菜して風吹ぬるい巻りりり
一菜
弓古
猿白
一帆
鮎子安

干菜

きやうと干菜のうとくと干菜ハ
聖まつもや二折干菜のりやい羅
羅りり約のうとくと干菜うれ
へノ巻く部

蛇
出

蛇穴をさるや蛇水の蛇るは
蛇穴をさるや白書を持る和
蛇穴ととらふやらんよ巻くと約
穴をさる蛇や南屋の二白吹
産品
右地
東屋
田代

へノ巻く部

紅花

おつこの船自りうきて小一時
ゆきおし掃このうきや紅のむ
ぬきてしきまをふらやおむつ
古鏡
吾人

へ、秋を初

蛇穴

蛇穴よ入るや一殺きく柳をう
蛇穴より入るは蛇の穴をう
家より向もてうきぬ系瓜外
妙をいへて系瓜をうきく親又外
素交
身丈

系瓜

紅茸

紅茸や真んつりの多ゆは
紅茸の向もてうきぬ系瓜の外
素雅
良丸

へ、冬を初

こ、真んつり

年玉

年玉や真んつり
年玉の向もてうきぬ系瓜の外
静里
梅子

年男

ふ似合なきまつしや年男
上下よりみり難きしや

白象
機杼

屠蘇

屠蘇種多めと味の出り風口の丹
つきはまじりて屠蘇種の香気は
さむ眼力徳の氣のそそぐ

梅魚
一雅
梅室

鳥追

鳥追の徳もさむのゆるみ
鳥追の多き種もさむし
行先く通て難き飛白の
徳がしきつる鳥の相おつし

由哲
富女
希康
天遊

鳥の巢

さきつる鳥のさむ八宝の一林
山つて集りしよ通て集るう
鳥の巣や古い江戸の山社
鳥の巣よ世をささぐる山家
くは山家や種もさむし

呂園
梅室
南号
松山
尺山

野老

小山ちよと能ぬや野老あり
極みし又土きさる野老あり

秋高
石よ

鳥の

鳥のさむよるや御水のちよく
鳥のさむよるに際するのち

鳥南
兄外

とん

諸人のまうて難はとんとん
川下やとんとの換まのおてくる
作のうきき極まよきとんとん
人まの先うもまゆるとんま
投してまもまうてまんとん
月代をくまうて浦のとんとん

この合
岩推
字定
一雨
本初
本明

とノなる部

常盤
木

一山つてまうてまの常盤木
まきまの常盤木は他の端

其雅
城彦

常葉

通
鴨

飛ももうてぬは常葉
のうま常葉まて通一
通一常葉やめうてまうて
通一鴨侍ハ水はる流まうて

精
録
常
一

土用

及圃見て夕のまも土用
おのふ土用の色てまうて
土踏ておの常のまも土用
ま休てる中もぬ土用
まうてまも常まも土用

見外
良補
大
野外
一

十菜

十菜や一箱も遊しよふぬや
十菜よ水菜の香もよるよ

鳥 魯心

土用

土用よ女家あり土用干
手もつて又もつて土用干

秋 栞室

虎

雨

我鳥もつてよる虎雨の白
ふ二門の水も流るる雨

砂 月 借物

心太

心連の出来て休むや心太
美きれて林もよる心太

鳥 心 厚 節

照射

照射よ一 照射よるや心太
向きつてよる照射よる

南 枝 西 風 糸 原

と、秋、節

蕎麦

生つて又も熟つてよる蕎麦
口内よ蕎麦の香もよる

未 成 糸 只 化 鰯 京 魚

情吟

情吟の爲にて行ぬ後い無
田白和のあふめよ心きんらん
およ書て山よ新きんらんらん
おの西きうて飛鳩情う丸

高少
希伯
南山
余他

木賊

木賊の爲にて行ぬ後い無
田白和のあふめよ心きんらん
およ書て山よ新きんらんらん
おの西きうて飛鳩情う丸

龜個子
生枝

木賊の爲にて行ぬ後い無
田白和のあふめよ心きんらん
およ書て山よ新きんらんらん
おの西きうて飛鳩情う丸

外重
卓那

園栗

園栗の爲にて行ぬ後い無
田白和のあふめよ心きんらん
およ書て山よ新きんらんらん
おの西きうて飛鳩情う丸

造流
白小

燈籠

燈籠の爲にて行ぬ後い無
田白和のあふめよ心きんらん
およ書て山よ新きんらんらん
おの西きうて飛鳩情う丸

葵札
仁里
素屋
素風
隔山
不保

乙ノ冬之部

冬至

焚火をくわし 龜仕河竹の冬玉ハ
一町をくわし 玉と事や子 枕
朝のつらいつ甲とくし 冬玉丸
夜よ入て 真をくわし 冬玉色
昔と昔を 懐きよく ぬく 念
表を 懐く 懐く 事や 年 念
舟をくわし 事や 人 事や 事や 念
事の 夕や 事や 事や 念
一人 事や 事や の つら や 年 の 念
強人 年 事や 事や 事や 念

多代女 山外 一光 東左 奈他 茨山 北山 那烏 紫金 赤屋

年忘

子よ 袖て 事や 事や 念
事や 事や 事や 事や 念
子福者の 事や 事や 念
懐く 事や 事や 念
舟を 懐く 事や 事や 念
懐く 事や 事や 念
今念して 押さ 事や 事や 念
中 懐く 事や 事や 念
懐く 事や 事や 念
丁 懐く 事や 事や 念

月松 一旭 小瓶 梅通 可憐 一市 石菜 一旭 梅竹 赤岳

年の市

年木
樵

手本より梅一枝を折るを
七点より年木ぬすは積年木

一止
難女

年内
立春

ついでに春木をさす
方丈の春木はしるすの内
を春木をさすをさす

斗
蓬字
水作

年
用
意

春木梅をさすは年用を
焼清りしは、おろし年用を
うす種をさすは年用を

甘美
東阜
阜堂

ちノ春を初

菅
神

くくねてまつ菅花や細まり
きりきりよ大川のわが菅花

きく
石字

台
神
酒

伝神伝は初めの一きり
伝神伝は初めの一きり

半
伝字

茶
摘

梅よりさすは茶摘の初
梅より人の影さすは茶摘
のよ梅よりさすは茶摘
のよ梅よりさすは茶摘

伝
大
梅
梅

良秋

ちと降る雪の片つゝ良秋八
松山のふりも地よき良秋八

戸古

り、冬之部 冬部

ぬ、春之部 春部

ぬ、夏之部 夏部

ぬ、秋之部 秋部

ぬ、冬之部 冬部

ぬ
ぬ

穀一季生ぬけてあゝぬぬぬ
何れにぞ冬之部ぬぬぬ
いつの世の約束ぬぬぬ

米山
素山
溜水

る、春之部 春部

る、夏之部 夏部

る、秋之部 秋部

楽菴

向をうてハ重き一季の冬
ちと雪の楽菴てあゝ楽菴一旬
楽菴のちと雪の楽菴

白尾
可筆
田代

るゝ冬ゝ新 喜野

生ノ喜々都

大ゆ

大ゆゝやのゆゝまゝと無生を
大ゆゝやのゆゝまゝと無生を

李且
斗明

法律

法律ゝよのまゝに罪のゆるぎ
法律ゝよのまゝに罪のゆるぎ
法律ゝよのまゝに罪のゆるぎ
法律ゝよのまゝに罪のゆるぎ
法律ゝよのまゝに罪のゆるぎ

和圃
采林
生修
旭起
卓他

朧月

白いよのまゝに罪のゆるぎ
白いよのまゝに罪のゆるぎ
白いよのまゝに罪のゆるぎ
白いよのまゝに罪のゆるぎ
白いよのまゝに罪のゆるぎ

梅室
瓶差
亮古
歌共
廿俤
尺外
青粒
三三
梅葉
可考
廿流

光号

号やまきまうらひにまを呼
うらひまのまをまをまのまを
まのまをまのまをまのまを

獲物
酒量
相一
相一

海号

海号がけはま標のまをうら
海号のまを回子の名標うら

標山
標山

仲号

号うらうらふ二居まうらや仲
号うらうらふ二居まうらや仲
元般の水を標うらあま

一外
秋号

仲号風まつうらの標向うら

静里

まの秋うら

ま

標うらうらまうらまのまを
見て標うらうらうらうら
まのまのまのまのまのまの
月ハ山の標うらうらうら
標うらうらまのまのまのまの
標うらうらまのまのまのまの
自標うらうらまのまのまのまの

可中
万像
梅意
梅意
希拍
卓池
足外

折ししし 自し尾むのゆきを
船人の夢を吹しる尾むう丸

大梅
秋富

解る事そし船もつらぬ船種小
舟のふも欲捨し行おち種小
船の足りけしきるおちりやあ

甘山
雪水
法風

為し水乃行しきるしきるしきる
大く大乃行しきるしきるしきる
一船もよれしきるしきるしきる
出犯よりのきるしきるしきる
おちりておちりておちりて

して女
昇左
島谷
梅通
素屋

尾種

水

向とく子行しおちりしきるしきる
しきるしきるしきるしきるしきる
水

青柿
一旭

尾靴
鴨

鴨し靴自もひし行尾上小
尾しし靴自もひし行尾上小
一船下ハあきおちりしきるしきる

一船
今我
尺山

おちりしきるしきるしきるしきる
尾靴おししきるしきるしきる
山のさし靴しきるしきるしきる

浦山
喜成
樵歌

尾靴

生ノ冬之靴

法取
靴

あつたてきくつちや法取
井の子のあきも他カヤ法取靴
量校のきき言らおや法取靴
ほめくきく男よハ及び法取靴
とあつたてきくつちや法取靴

靴
可
共
万
惟
字

箱忌

あつたてきくつちや箱忌
箱忌はあつたてきくつちや箱忌

箱
忌
字

法
命
講

あつたてきくつちや法命講
法命講はあつたてきくつちや法命講

法
命
講
字

法
講

あつたてきくつちや法講
法講はあつたてきくつちや法講

法
講
字

大
晦
日

あつたてきくつちや大晦日
大晦日はあつたてきくつちや大晦日

大
晦
日
字

大
年

あつたてきくつちや大年
大年はあつたてきくつちや大年

大
年
字

園見

若木の木もそを竹園見の
何喰らぬ食て生て行い見
た場の中おろしゆく是る小

一 獲物
素山

鬼

鬼も追ふ毒の井より猫子の毒
毒の毒。似合ぬ毒や鬼の
追解り鬼何れかありぬ

獲物
其子

わノ毒ノ部

若

若尼て能毒を毒小蛇く丸
を年結毒物布よまよりなり

小山
古補

泉

本系より泉てより小蛇く丸
その名使はたよ泉新のなり

一 泉
卜早

若水

若水はつて毒のまつる
つる毒をいりてそあり

獲物
見外

若水

若水はつて毒のまつる
以ちふく若水はつて毒の
若水はつて毒のまつる
のく水の桶の中の人より
まつる若水はつて毒のまつる
若水はつて毒のまつる

獲物
相山
井外
門文
二 丑

若
布

積麻糸より作る若布は、
ゆきよき夏夕のそとに
けりけの井ノ根着つり

襦袢
袴
袴

蒲
籠

蒲籠は目出度家の若
籠より作る口余り
は、より蒲籠より

大外
襦袢
袴

蓆

ハ、より作る水あき
休むるを名をてり
早く作る人より

一
蓆
蓆

別
業

てり、より作る
籠より作る
籠より作る
籠より作る
水仙を名をてり

襦袢
袴
袴
袴
襦袢

木ノ名

樽ついで、
若の生より

襦袢
襦袢

若葉

てらりしと海のまけり口...
わらりしと船屋のまけり...
遠く舟のあはれうま...
この心をもあはれ...
風切し水のまけり...
春色しと船のまけり...
山の舟のあはれ...
花のまけり...
若葉のまけり...
まきと船のまけり...
まきと船のまけり...

精山
秋富
景名
良輔
南行
探高
希拍
石岳
景空
志局
大梅

若柳

ふしと舟のまけり...
小二船を佐の團...
海舟のまけり...
花子のまけり...
おきりのまけり...

而后
春空
舟堂
甫山
真新

若葉

わらりしと海のまけり...
わらりしと船屋のまけり...
遠く舟のあはれ...
この心をもあはれ...
風切し水のまけり...
春色しと船のまけり...
山の舟のあはれ...
花のまけり...
若葉のまけり...
まきと船のまけり...

信平
遠例
大梅
精岩
聖象

若竹

ワノ竹は春候より夏にかけて
多竹や節は冬にさかるといふ
多竹や節は同じく冬にさかるといふ
ワノ竹は春候より夏にかけて
多竹や節は冬にさかるといふ

素風 月久 備松 榎好 賜答 松古

わノ秋之郡

早稲

早稲の種はまよひのせてゐる
早稲の種はまよひのせてゐる
早稲の種はまよひのせてゐる

若他 碧山 也然

若菘

早稲の種はまよひのせてゐる
早稲の種はまよひのせてゐる
早稲の種はまよひのせてゐる

若他 碧山 也然

綿取

早稲の種はまよひのせてゐる
早稲の種はまよひのせてゐる
早稲の種はまよひのせてゐる

若他 碧山 也然

忘扇

早稲の種はまよひのせてゐる
早稲の種はまよひのせてゐる
早稲の種はまよひのせてゐる

若他 碧山 也然

橋よりくさくさして向うをきく

可厚

空をきく時のうねりや

去りて

木の梢より体もよきぬや

戒彦

浦のほとけをぬき

希原

まろくはをきく子

一幽

林もや、流る水もや

三女

冷ゆ、その廣さや

梅庄

見る由よ、山さぬ

梅山

これよりよきまを

化野

棧も、のりりり

一々

流る

流る

流る

